

青白磁

12 世紀後期のこの碗は、井戸の使用を終了する際の儀式に用いられた捧げ物であると考えられています。儀式の道具はしばしば、使われなくなった井戸の中に置かれ、埋められました。考古学者たちは、平泉の柳之御所地域で保存状態の良い碗を回収しました。平泉は当時の奥州藤原氏の居住地であり、政治の中心地でもありました。

この碗は青白磁の古典的な作例です。少量の鉄を釉薬に使用することで、青白色の色調が生まれます。これは中国北東部の、青白磁の生産地として有名な景德鎮でつくられました。縁の部分は、開いた花を模した小さな突起をあしらった「輪花」と呼ばれる様式の装飾がほどこされています。青磁は日本で出土することは稀で、この碗は非常に価値が高い発見です。平泉では、藤原氏の隆盛の頃、中国から多くの陶磁器を輸入していました。